

「自然界における左と右」マーティン・ガードナー

[訳]坪井忠二・小島弘、1992

本書が出たのは初版 1971 年（新版 1992 年）で、また著者ガードナー氏は 2010 年 5 月に亡くなっていますから、ここで紹介する本は「古い」です。科学啓蒙書の多くは出版時点での科学の最新情報を取り上げるため、時間が経つと内容の古さがどうしても目立ってしまいます。このため、この種の本は時代が経ても読み継がれる本つまり「古典」になりにくい宿命を持っています。しかし、この「自然界における左と右」は古典と評価されている本です。なぜでしょうか。実はこの本を初めて読んだのは高校 3 年生の時に、受験最中に夢中になって読んだ記憶があります。最近読み直して改めて素晴らしい書物であることを感じ、この「なぜか」に答えることにしました。（内容そのものについてはネット検索でわかります。）当時の私が完全に理解できないまま感激した理由は、今考えると、この本に「不思議と感じる心」が満ちていたからです。今の時代、ある事を不思議と感じても、すぐにその解説を見つけ、無知だったと思ってしまいます。そのような経験から「不思議」と感じることをためらってしまいます。しかし「不思議とを感じる心」は科学研究においてとても大切な「心」です。そして現在、人が「当たり前」と思っていることの多くは「不思議」と考えた学者・研究者達が長い時間をかけて「当たり前」にしてきたものです。「自然界における左と右」は「不思議とを感じる心」を刺激し、それを育てています。是非この本を読んで心を躍動させてください。